

## 平成27年度 第1回理事会・総会を開催

### 昨年の活動について報告

相談件数は昨年度と同じ水準

6次産業化のサポート活動増える

6月3日(水)、東京都千代田区の日比谷図書館において、平成27年度 第1回理事会・総会を開催し、議案の審議とともに、昨年度の活動について報告を行いました。

理事会には当機構の10名の理事のほか、オブザーバーとして16名が出席しました。

開会の挨拶のあと、副理事長の伊藤元重氏より、T P Pの今後の動きについての考え、アジアの中間所得層の増加による農作物・加工品の海



総会の様子

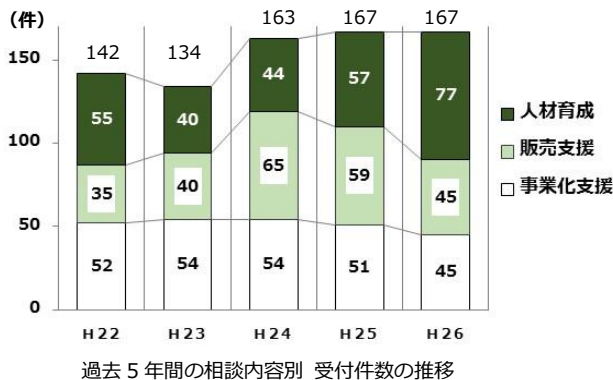
外輸出の機会増大などについてお話しいただきました。その後、協議事項の審議と平成26年度の活動状況の報告が行われました。

続いて行われた総会では、54名が出席。報道機関8社による取材も行われました。

会の冒頭、当機構顧問の丹羽宇一郎氏より、日本の農業がこれから世界に出ていって競争力をつける必要があること、世界の人口増加に対応できる安定した食料供給の重要性などについてお話しいただきました。

当機構の昨年度の相談受付件数は167件、設立からの累計件数は1200件に達しました。

相談内容の内訳を見ると、



平成26年度の販売支援に関する相談45件のうち、小規模商談会の開催などバイヤーとのマッチングやマーケットリサーチを行う販路開拓支援は38件と84%を占め、農業者による6次産業化への動きが活発化する中、過去最多となりました。

また、人材育成事業の一環として取り組んでいるセミナー・講演への講師派遣は71件で、25年度比で29件増加(169%)し、過去最多となりました。これは、地域金融機



懇親会の様子

関から取引先の農業者や自職員向けのセミナー・講演への依頼が増加したことが背景です。

総会後に行われた懇親会では、会員同士が取り組んでいる活動を紹介し合いながら親睦を深めることができました。

「農業」という共通点があるせいか、話が尽きない様子でした。

今年の2月でJ・PAOは創立から8年が経過しましたが、引き続き、事業化支援、販路開拓支援、人材育成の3本柱で、プロ農業者のお役に立てるよう、より一層邁進してまいります。

## □ 専門部会の動き (5月分)

### 【事業化支援・販売支援①】

コスト削減を考えるときの前提条件について話をしました。関東では麦と米の二毛作をしている所もあること、コストと面積はきれいに正比例する訳ではないことなどの意見が出ました。

直播に集中すると、作業時期も集中して直播の効果が薄れるため、直播と田植の組み合わせが良いとの意見を踏まえ、次回以降は直播と田植の組み合わせをモデルとしてコスト削減を考えていきます。

### 【事業化支援・販売支援②】

当部会の目的・取り組み内容の明確化について、事務局作成案をもとに意見交換を行いました。この他、会員のノウハウなどを共有するためのリストを作る、販路やパッケージを検討するときの流れや確認事項を作成する、ブランディングのモデルを作るなど今後の進め方についてさまざまな案が出ました。

次回以降もこれらについてさらに議論を進めていく予定です。

### 【事業化支援・販売支援③】

現在の個別案件（酪農経営による製酪工場更新投資計画、直売所などの経営改善の進捗管理、野菜リレー栽培の事業計画など）に関する情報の共有、今後の部会での取扱い方について討議しました。

また、成果物の内容向上に向けて、昨年度の個別案件の成果物を見ながら、改善点や重要なポイントについて出席者で意見交換しました。

### 【人材育成】

今年度の企業派遣型ワークショップ研修について話し合い、他チームと情報共有したい、PDC Aの時間が十分取れなかったなど昨年度の受講生からの要望を踏まえ、研修内容を検討していくこととしました。

この他、第3者への経営継承は具体的な

検討に入る前に検討の切り口を明確化するなどの意見交換、とちぎ農業ビジネススクールのカリキュラムなどの情報共有を行いました。

次回は、とちぎ農業ビジネススクールの来年度カリキュラム、企業派遣型ワークショップ研修の内容、第3者への経営継承の進め方について検討する予定です。

## □ J-PAO 白書を公表

J-PAO は、6月3日に開催された通常総会の席上で、「平成26年度J-PAO白書」を公表しました。

今後も、「プロ農業者」の課題解決に向けて、実践・試行の中から知恵を出し合い、総合的な支援を継続してまいります。

平成26年度J-PAO白書（ダイジェスト版含む）をJ-PAOホームページで公開していますので、ぜひご覧ください。

### 平成26年度の主な取組み

福島県の担い手支援事業に経営アドバイザーとして参画

南相馬市タマネギ産地化プロジェクトを支援

不振農業法人の事業計画策定を支援

日本公庫主催「アグリフードEXPO」に出展する農業者を支援

J-PAO個別商談会への出展を通じた販路拡大を支援

経営力向上を目指す農業者をJ-PAO会員企業に派遣し、課題解決能力の向上研修を実施

金融機関やJA職員向けに農業融資等について講義・研修を実施

地方公共団体が主催する農業ビジネススクールの企画・運営

## □ 主な活動 (5/26~6/29)

6/3 平成27年度第1回理事会・総会

6/15~16 研修講師（農林中金アカデミー、新潟県）（伊藤）

6/16 研修講師（日本公庫）（竹本）

6/17 第93回企画運営委員会

6/18 研修講師（農林中金アカデミー、三重県）（竹本）

6/22 研修講師（福岡銀行）（伊藤）

6/23 研修講師（農林中金アカデミー、愛知県）（伊藤）

## 往復書簡

今回は、株式会社麦わら農場の青木理紗社長と当機構理事長高木勇樹の往復書簡 後編です。

拜啓 高木勇樹様

ご返信ありがとうございます。高木さんのお手紙を拝見し、時節のご挨拶のバリエーションが豊富で素敵だと常々感じております。私はあまりそういったご挨拶が得意でなく恐縮なのですが、梅雨に入り湿度が高く気温も高くなってきておりまして食材の管理に気を付けなければと思っております。

行動力や姿勢に評価をいただいて本当にうれしく思います。私としては農業に関わっている理由は自分自身が一個の人間として取るに足らない存在だとしても、生まれたからには何か真剣に取り組みたいというのが原点でして、苦澁を耐え抜いているとか、また何かを捨てて飛び込んだという意識はあまりありません。ただ他の方々から見ると同情を受けることが多く(笑)お恥ずかしい限りでございます。

さて、近況についてですが、一番の問題は人の確保にあります。今まで何人が雇用をして参りましたが、上手く定着できず、現在、正社員は私のみで他はアルバイトを活用しています。前回も申し上げましたが、やはり販路を確保することが何よりも重要なことと現在は考えておまして、そのためケータリング・弁当の確立を一番の優先事項にしており、生産のほうは他の農家にほとんど依存している状況です。

今までの雇用について大いに反省点が多いのですが、問題は大きく三点かと思えます。一番の問題は自分自身に余裕がないこと、二点目は雇用する人材の選定を間違えたこと、三点目は地元とのつながりが薄いことにあるかと考えています。

また最近ビジネスを成功させてきた方々に話しを伺う機会があったのですが、どの方も給与が高いことが良い人材を雇用するには重要である、とお話されていきました。農業の中に良い人材を確保できないことは業界が繁栄しないことにもつながると思えますが、やはり利益をきちんと上げることというのがとても重要なのだな、と痛感しております。今年に入りある程度の利益を確保し、設備投資をして参りましたので人との問題に改めて向き合う時期が来たなど思っております。

近況の課題としてもう一点はお金の確保です。規模をある程度拡大するにはキャッシュフローの問題からやはり資金調達をしなければいけないと感じています。そういった中で出資というようなお話もいくつか頂戴していたのですが、いずれも条件面から折り合いがつかず実現はしていません。こういった過程を経て、改めて資金面から見た際に農業は国の保護のもと、有利な条件で借入ができるということは大きな特徴だと思っております。

人と資金確保を今年度の前半の目標にしています。その後はケータリング・弁当の販売先が東京がメインであることから、東京に厨房を持つこと、そして安定的な法人の販路を見つけていくことが目標だと思っております。毎日弁当・ケータリングの売上が立つような売り方がどのようなものになるのかはいくつかトライアルしている最中ですが、基本としてももう少し商品、並びにそれに伴う業務の定型化が必要だと痛感しております。

少し長くなってしまいましたが一通りやってみて改めて地に着いた課題が見えてきたかな、と思っております。一つ一つ課題に取り組むことで自分のやりたいことを形にしていきたいです。

つらい時に、前に高木さんが「若いうちの自分への厳しさなんて全然厳しくない」と仰っていたことをよく思い出します。高木さんのように自分に厳しく他人に寛容な人間になれるよう努力したいと思います。

また今後もしいろいろとご報告させていただけると幸いです。

敬具

平成二十七年六月吉日

青木 理紗 (あおき りさ)

一九八〇年 東京都生まれ  
二〇〇三年 東京大学文学部を卒業後、アクセシブルな株式会社に入社。経営コンサルタントとして活動。

二〇一〇年 農業生産法人株式会社麦わら農場を設立し、代表取締役として農業経営を開始。



拝復 青木 理紗 様

六月八日に関東地方が梅雨入りして以降、ざーっと降ったり、かつと真夏日のうだるような暑さに閉口し、しとしと降る梅雨らしい雨にほっとしています。この頃一番似合う花はやはり紫陽花（あじさい）ではないでしょうか。

青木さんにとつては、それより何より食材の管理が大事ないうことは、我が家でも火入れに神経を使っていることからよく分かります。

今回のお手紙を読んでまた感心しているのですが、青木さんの自分をみる眼が卒直で客観的だということですよ。

「近況の課題」ということで、人の確保とお金の確保を二大課題として掲げておられます。

起業されたのが五年前。一通りやってみて改めて地に足がついた課題が見えてきたかなと書いておられますが、わずか五年で、無から有を、そして更にひとつのかたち（持続的農業経営）へ挑戦されているのは実にお見事としが言いようがありません。生まれたからには何かに真剣に取り組みたいという原点がなさしめられているのでしょうか。

私はこれまでの人生から自分のモノサシの感性を豊かにすることが、棺桶に足をつ突つ込むとき自分の人生を振り返り大往生の境地に至る要諦と確信しています。私のここであるところの感性とは、想像力、創造力、先見性、直感力、判断力、責任感の総合力です。

青木さん、二回のお手紙のやりとりですが、あなたは磨けば豊かになる感性のモノサシを既にお持ちであることを私は確信致しました。

「若いうちの自分への厳しさ」そして「慎重にしてかつ大胆」これが鍵です。

加齢のせいでもどうしても説教調になってしまいがちなことを、これに懲りずにまたお話を聞かせてください。

敬具

平成二十七年六月吉日

## 高木 勇樹（たかぎ ゆうき）

一九四三年 群馬県生まれ

一九六六年 東京大学法学部卒後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、

大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、

大臣官房長、食糧庁長官など歴任。

農林水産事務次官、二〇〇一年退官

一九九八年 農林中金総合研究所理事長

二〇〇二年 農林漁業金融公庫総裁、二〇〇八年同公庫退任

二〇〇三年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長

二〇〇七年 現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事長などの立場から、わが国農業・

農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力。

